

小説家の椅子

「人間椅子」(江戸川乱歩)より

藤田ヒロシ

《登場人物》

その女 人気小説家。周囲からは「先生」または「奥さま」と呼ばれている。

その男 彼女の書齋に置いてある椅子の中に潜んでいる男。

ある学生 彼女のファンであり、小説家を志す者。

○「その女」の書齋。

舞台奥には一面に幕。机、椅子。必要最小限の物しかない空間。

音楽（ベートーベン ピアノソナタ第23番第1楽章）

その女が机の向こうに立っている。その向かいに椅子。（ここにある学生が座っているという体で話は進む）

その女

こんにちは、はじめまして。ゴメンなさいね、狭くて。他にも部屋はあるのだけど、あなたと会うなら書齋が最適だと思ったの。さ、その椅子に掛けて、楽にしてーええ、私の書齋よ。作品は全てこの部屋で書いているわ。ええ、そう、全て。私ね、この部屋の中でだけ小説家でいられるの。この部屋を一步出れば、この家の「奥さま」で、この家を一步出れば、何かしら、おばさん、かしらね。

と、軽い声で笑い、如何にもと言った感じの身振りをして見せ、

その女

いいの、いいの、お世辞は。白髪も、皺も増えだし、あるわよ。よく見て。

と、椅子に近づく。

その女

ね、あるでしょ？おばさんでしょ？いいの、いいの、お世辞は。「先生」「奥さま」なんて呼ばれて、そう言うのには反吐がでるわーあら、ごめんなさい、汚い言葉遣いで。でもね、正直な気持ちなのよ。「先生、最高です」「先生、大好きです」「先生がいる世界線に生まれて良かった」……そんな言葉を寄こす人は、毎日ほら、ご覧の通りよ。

と、机の上の封筒の束を手で掲げる。そして、別に置いてあった一つの封筒を手にする。

気が付くと音楽が消えている。

その女

これは違った。久し振りに……本当にそう……こんなにもゾクつとする手紙を頂いたわ。

静寂。

その女

あ、嗚呼、そう言うことね。あなたが寄こしたこの手紙を読んで、私が激高して、あなたを呼び付けた。そう考えているのね？

弾んだ声で笑い、

その女

それで、ずつと、あなた、体がガチガチなのね。（一段と笑い）ゴメンなさいね、だって、こちら身構えてしまう緊張なんですよ。

その女

と、また笑った後で、深く息を吐いて、  
安心して、文句を言いたいわけでも、説教をしたいわけでも、ましてや捕って食べようってわけでもないわよ。楽にして。

と、深呼吸をしてみせて、

その女

この手紙、本当に素敵よ。好きだの、最高だの……そんな薄っぺらな言葉とは無縁で、言語化できない心の内を、どうにかして綴ろうとしている不器用で、危なっかしくて、それでいて自由で、なにより真摯な言葉。それによって綴られた手紙……その最後には「あなたを越える小説家になります。ですから、あなたを知りたい。是非一度お会いして下さい」

あら、ちつとも恥ずかしがることなんてないわ。「会いたい」と書いて寄こす人に会うなんて事はこれまではなかったのだけれど、あなたには会いたいって思ったの。なぜか？それはすぐにわかるわ。

と、封筒を丁寧に机に戻すし、先ほどよりは小さく笑い、

その女

まだガチガチよ。楽にして、って言われても……よね。でもきつと、すぐに楽になるわ。ねえ。この部屋に最初に入ってきた時の第一印象を覚えてもらえるかしら？

と、椅子の横に立ち、

うん、うん、そうよね。壁いっぱいの本棚もなければ、山のように積まれた資料もない、どころか、ほとんど何も無いものね。書斎と言われても信じられないのもわかるわ。でも、言った事に嘘はなくて、私は部屋の中でだけ小説家でいられるのよ。

当然の質問よね。まさにその答えが、あなたが抱えている全ての疑問の全ての答え。だと思っわ。

と、椅子を離れ、

その女

ねえ。あなたは書く時に何が必要？例えば音楽は流したりはするのかしら？クラシックやジャズ、パンクやR&B……波音や雨音を流す人もいる。生活音がないと書けないって人もいるし、かと思えば「音は一切駄目」と、書斎を防音仕様にした方を知っているわ。あとは煙草がと言う人もいる。お酒がと言う人もいる。どちらも最近では少ないでしょうけど、いるわ。小説家にはそれぞれに「書くときに必要不可欠な物」が存在するもので、この部屋は【私のソレ】があるたった一つの場所ってことなのよ。

と、部屋の中を回る。

その女

いいえ、とんでもないわ。【私のソレ】が自由を与えてくれるのよ。

不自由なんて感じようがないわ。

弾んだ声で笑い、

随分、楽になったわね。でも、先を急がないで。私もドキドキしているの。【私のソレ】について話した時、あなたがそれを知った時、私は……此処から「それじゃまた、お元気で」と見送ることができるかしら、どうかしら、どうなってしまおうのかしら、と（胸に手を当て）今度は私がガチガチになってしまおうさうだわ。

と、もう一度ある学生が送ってきた封筒を手にして、また弾んだ声で笑う。

照明が変わり、その女のシルエットが際立つ。

その女

【私のソレ】は以前からこの部屋にありました。大切な物である事は間違えないのですが、それでも代わりの利く物の一つでした。それが【私のソレ】になったのは、一通の手紙が届いた事からでございます。それはゾクつとする手紙でございます。

舞台奥の幕を何かが押す。その形がうつすらと浮かび上がる。

手にしていた封筒から便箋を取り出して、

その女

まず「奥様」という呼びかけの言葉で始まり、堅苦しくて、何処か薄気味悪い挨拶の後にこう続いておりました。

『私は今、あなたの前に、私の犯して来ました、世にも不思議な罪悪を、告白しようとしているのでございます』

その厚みからただのファンレターではない事は確かでしたが、その様な物が届く事も珍しい事ではありません。それらは何について書かれている物であれ、どれも決まって酷く退屈で読むに堪えない代物でした。差出人……「その男」と呼びましょう。その男は私がそれらを相手にしないでろうと、ですからその様な書き出しをしたのでしょうか。私も小説家ですから、それが「畏」だとう事は承知していましたが、結果から申し上げれば、見事にその「畏」にハマったのでございます。

幕を何かが更に押す。その形がややハッキリとしてくる。

その女が便箋を一枚めくる。

その女

「告白」はすぐには始まりません。その男について、つまりは自分自身についてあれこれと書かれていました。生い立ち、

と、便箋を一枚、床に捨てる。

その女

容姿へのコンプレックス、

と、便箋を1枚、床に捨てる。

その女

世間のへの不信と不満、

と、便箋を1枚、床に捨てる。

その女

それに職業、

と、便箋を1枚めくるが、床には捨てずに手に持ったままにする。

幕を押していた何かが引込む。

その女

私は小説家ですから「一体何処から書き始めるべきか」その点には苦心するもので、その男のそれは相当なものであった事は簡単に想像できると言うものです。自分自身を一面識もない私に伝えるわけですし、何より職業は（と、先の便箋を見つめ）言葉とは無縁のものです。とは申しましても、

と、次々と便箋を捨ててゆく、

その女

くだい、くだい、回りくだいっ！これも、これも、これもっ！、嗚呼これも。些細な漏れも無い様に、完全完璧に伝えようとするあまり、「あれも、あれも」と話がくだい！一体あなたの罪悪とは何？それをなぜこの私に！良いから早く言いなさい！

と、瞬間感情的になり、

その女

そう、それも罨なのでございます。そこには呼吸をし、体温を持つ、生身の言葉で綴られた……読む者を離さない引力がありました。（便箋を掲げ）これはただの手紙ではなかったのでございます。

照明が変わり元の部屋に戻る。

その女

（ある学生に）そうそう、あなたが手紙と一緒に送ってくれた作品、読ませてもらったわ。

と、机の上を探すが見つからず、

その女

あれ、とてもよく書いていたわ。リズムカルな文体で、わかりやすく整理された構成。本当によく書いていたわ。だけれど、あれは誰の何の話かしら？それを少しも覚えてはいないの。なめらが過ぎてスーツと通り過ぎてしまったのね。

と、机の上を探すが見つからず、

その女

ほら、原稿すら見つからない。

「良く書けている。まるで文例集のようだ」と、私も昔はよく言われたものだわ。ええ、当然よ。最初から小説家の人間がどこに……中には居るのよね、ギフトを持った……だけれど私含めて大半は凡人よ。そんな凡人の頭に浮かんでくる言葉なんて、薄っぺらな模造品でしかないわ。それを隠す為にあれこれと苦心して技を凝らすけれど、自分のどこがどう薄っぺらか？をわかっていないと、適切適量に技を持ち入れずに、ぱっと見素敵な「く様な物」ばかりが出来てしまう。あなたと昔の私がそうであったようにね。さっきも言った様に大半は「薄っぺら」なのよ。だからそれ自体は恥じる事ではないわ。肝心は如何に「薄っぺら」から這い出するか、その術を探し手に入れるか、それが凡人の持ち得るギフトではないかしらね。

と、捨てた便箋を一枚ずつ拾い集め、

その女

あなたは一体何を書きたいの？ウケるもの、売れるもの……それは大事な事よ。だとしても、あなたにしか書けないものって一体何かしら？

それを求める事で【あなたのソレ】に導かれるわよ。そうして手に入れば私を越える事も出来る。だから私の（胸に手を当て）話を聞いて、求めてードキドキも落ち着いてきたわ、勿体つけるのは止めましょうね。

と、便箋を一枚だけ手に残し机の上に置き、それに目を落とす。

照明が変わり、その男のシルエットが浮かび上がる。

その男

私の専門は椅子を作ることでありました。私の作った椅子は、どんな難しい注文主も、きつと気に入ると言う評判で、それを作るには、ちよつと素人の想像出来ない苦心が要るのでございますが、でも、苦心をすればただけ、出来上った時の愉快というものはありません。

布を押して椅子の形が現れる。

その男

一つの椅子が出来上ると、私は先ず、自分で、それに腰かけて、座り工合を試してみます。

と、浮かび上がった椅子に座り、

その男

うん。うん。

と、深く息をつく。

その男

出来に満足が行くと、次に妄想をして試してみます。この椅子は

どの様な屋敷に運ばれ、どの様な部屋に置かれ、どの様な方がお座りになるのか？難しい注文であればある程、この妄想は深く熱く詳細なものになり、私は資産家、政治家、夫人、令嬢、映画スタア、スポーツ選手、娼婦、芸術家と、様々な人物になってみせるのでございます。

と、目を閉じて妄想の世界に沈んでいく。

もごもと言葉にならない音を発し、座ったままだが手足が動き、何者かになっている様子。同時に椅子のまわりの布が蠢く。

しばらくして、動きが一切止まると、次の瞬間、上半身がガクンと力なく垂れる。

その男

どれも現実の私とは縁遠いものばかりですから、愉快と言えば、そう言い表す事も出来ましようが、覚めれば、哀れにも醜い自分自身を思い知らされ、ですから私は椅子を完成させる度に、言い知れぬ味気なさに襲われる次第で、終いには、

と、突然立ち上がり、

その男

こんな、うじ虫の様な生活を、続けて行く位なら、いっそのこと、死んでしまった方がましだ！

仕事場で独り、ノミを使いながら、釘を打ちながら、塗料をこねくり回しながら、そう考えるに至りました。それから私はあれやこれやその手段について真面目に検討を重ねたのでありますが、なんと言い表せばいいのでしょうか。人間というのはとてもなく愉快な生き物とみえて、死のうと真面目に考えているその頭で、不意に突飛で、それでいて、どうにも放つてはおけない計画を思い付いたのでございます。片方で死に方を、片方で生き方を、結果としては同じ事なのでしょうか？私がこの計画を実行したのは当然と言う事なのでしょうか？この手紙を最後までお読みになった奥さまはどの様にお考えになるのでしょうか？

静寂

その男

さて、前置きが長くなってしまいました。この突飛な計画が、私の罪悪の始まりです。いよいよその事に付いてお話ししたいと思います。

と、幕の後ろ側へ姿を消す。

そして、幕の向こうで、その女が椅子に座る。

その女（声）

その男の計画はこうでした。自らが作った椅子を改良し、その椅子の中に自らを閉じ込めると言うものでした。正確には全く閉じ籠るのではなく、椅子に身を隠し、忍び込み、夜な夜な這い出て



は盗みを働くと言うもので、都合のよい事にその時に作っていた椅子はホテルからの注文で、ロビーに置かれたのでございました。と、幕の下から這い出てくる。

その女

ですから、ホテルの売上、調度品のみならず宿泊客の金品と、窃盗には格好の場所と言う具合で、その男は、見事にやってのけたのであります。窃盗はすぐに成果を上げ、そうしたならばその男はとつとホテルから逃げだすつもりでいたのですが、そうはならなかったのでございます。

と、幕の下から消える。

そして、幕の向こうで、その男が椅子に座る。

その男（声）

ホテルのロビーと言う場所は、そこは外国からの客も多く、実に様々な人が出入りします。その事で窃盗は何も難しい事はなかったのですが、それ以上に、これまで望むどころか、想像すらしていなかった悦びを与えたのでございます。

ある時は筋肉質の、ある時は細身の、またある時は脂肪を蓄えた、様々な人物が私の上に座ります。なめた皮一枚隔てて、その人物の体温が、呼吸が、私に伝わってくるのです。もちろん、椅子の中は真つ暗な闇でございますから、私は視覚に囚われることなく、研ぎ澄まされた触覚、聴覚、嗅覚で、私の上に乗っているその人物の昨夜の行い、今朝の食事、好み、果ては悩みや心配事と、つぶさに知ってゆくのでございます。

ゆっくりと、その男が動くのが幕越しに見える。

その男（声）

それは無学の私などでは言い表しようのない、なんとも摩訶不思議な交流でありました。もちろん、相手は私の太腿を、柔らかく座り心地のよいクッションだと信じて疑ってはいませんが、紛れもなく私という生身の人間なのです。相手が椅子の上で動けば、それに合わせ最も心地いいように、私が合われます。跳ねれば、柔らかく受け止め、立ち上がるうとすれば、極わずかにではあります、その臀部を押し上げます。想像でしかありませんが、私という椅子に座った全ての方が「何て座り心地の良い椅子だ」と言う以上の快適を、無意識ではありますが、私と言う人間を感じ、そしてホテルを去った後に「あの椅子！」と、事あるごとに思い出しているに違いありません。時間も空間も越えて、その人の中に存在し続ける。これほどの交流が他にありませんか！私の醜い容姿は関係のない、目に見えるものは何も意味を持たない闇の世界だからこそその悦びです。私はその虜となり、窃盗、金銭などと言うのはもうすっかり、どうでもよくなってしまうのでございます。その気持ち、奥さまにはきつとおわかり頂けると思っています。

おります。

と、動きが激しくなったりしながら、最後は静かに静止する。

そして、その男、椅子が幕の後ろにゆっくりと消えてゆく。

その男（声）

さて、私がホテルへ参りましてから、何ヶ月かの後、私の身の上一つの変化が起ったのでございます。ホテルの経営者が、居抜きのまま、ある会社に譲り渡したのであります。すると、その会社は、従来の贅沢な営業方針を改め、もっと一般向きの旅館として、合理的な経営を目標むことになりました。その為にならなくなった調度品などは、ある大きな家具商に委託して、競売にとなつたのですが、その競売目録の中に、私の椅子も加わっていたのでございます。

それを知った私はいよいよ椅子から出て、人生をやり直そうかとも考えました。窃盗により金銭は手に入れましたから、以前よりはいい暮らしが出来る、その事は間違いないかもしれませんが、結果としてはそうしなかつたのでございます。そうです。金銭でやり直した程度の人生などでは、最早満たされる事はなく、それどころか以前にまして味気ない暮らしになると、私にはとうにわかつていたのでございます。

道具屋の店先で、2・3日の間、非常に苦しい思いをしましたが、競売が始まると、私の椅子はさっそく買手がつきました。古くなくとも、十分人目を引く程、立派な椅子だったからでございます。よう。

と、クククと低く笑い蠢く。

その男、椅子が幕を押し、形が現れる。

その男（声）

買い手と言うのは立派な屋敷の持主で、私の椅子は、その幾つもある部屋の一つに置かれましたが、私にとつて非常に満足であったことには、そこは夫人が書斎として使用されていたのでございます。以来、約1ヶ月の間、私は絶えず、夫人と共に居りました。食事と就寝の時間を除いては、夫人のしなやかな身体は、いつも私の上にあります。それというのも、夫人は、その間、書斎に詰め切つて、小説の執筆に没頭していられたからでございます。

その男が小刻みに震え、次第に全体が揺れ始め、

その男（声）

奥さま。先ほども言いました通り、人間というのとはんでもなく愉快な生き物とみえて、あれ程に告白したいと焦っていたその瞬間が、いよいよ、まさにやって来たというのに、私の手は震えています。これは恐れでしょうか？迷いでしょうか？何にしても、

私は今、絶頂に達しようとしているのであります。闇の世界に身を沈めて、なめした皮一枚隔てた交流を重ね、私はとうとう知ってしまったのでございます。私と言う人間の、望んではならないと避けてきた真実を知ってしまったのでございます。

椅子から手がヌクツと伸びて、蠢く。

その男

奥さま……嗚呼、奥さま。私はその名を呼び、その肌に、この手で直に触れたいと願っているのです。私のこの真実の肉体を、その目の前に晒したいと願っているのです。

と、暴れているかのように激しく蠢く

その女が幕の後ろから出てくる。手には便箋。震えている。数枚の便箋をめくり、

その女

『奥様、あなたは、無論、とつくにお気づきのことでございました。あなたの御主人が、あの道具店で、私の椅子を御買取りになつて以来――』

と、言葉が途切れ、便箋を投げる様に落とす。

その女

(その男の声で) 奥様、それはあなたなのでございます。

椅子の人物の動きが止まる。

その女、幕の奥の椅子を見つめる。

照明が変わり元の部屋に戻る。

その女

なんと！この世のものとは思えない、おぞましいの所業！

と、床の便箋を見降ろし、次の瞬間、学生に向かって手を向ける。

その女

(ある学生に) 言わなくてもいいわ。人間が？椅子の中に？そこに生きている？突飛にも程がある……疑うその気持ち、わかります。作り物。(深く何度か頷き) そう言ってしまうのは、常識的な意見でしょうけれども……私は小説家で、あなたはそれを志す者なわけですから、常識という平坦で退屈な意見に、自らを閉じ込めるなんて事が叶うかしら？そんな自分なのだとしたら、あなたは自分を許せるかしら？

と、ある学生の椅子の横に立ち、それを縁取る様に触れながら、

その女

体を丸ごと包み込む大きく立派な椅子であれば……その男にはおぞましくも愉快なギフトがあった。そうは考えられませんか？

と、落ちていた便箋を拾い集めながら、

その女  
呼吸をし、体温を持つ、生身の言葉。これを読めば、これこそが本物なんだと言う事が必ずわかるわ。

と、便善をある学生に差し出す、すぐに引っ込めて、

その女  
これは私への手紙。あなたには何が贈られるのかしら？

音楽（ベートーベン ピアノソナタ第23番第1楽章）

その女  
誰にだって秘めた想いや行いはある。そういうものでしょう。私の半分ほどの人生のあなたにだって、相応の罪悪、殺意、妬み、熱情、決して口に出来ない、誰にも知られてはいけない。裏腹に、言いたい、知られたい、心の内側、ヒダの一枚一枚まで容赦なく晒されたい！……あるのでしょうか。わかるわ。私は小説家で、あなたはそれを志す者だもの。

幕の奥にある椅子に座るその女。

幕が蠢く。

その女  
人間というのはとんでもなく愉快な生き物。【私のソレ】【この椅子】に身を沈め、絶妙に優しく包まれた時、なめした皮一枚を通して、闇の世界と内通し、善も悪もなく、あるがままに矛盾なく、「奥さま」でも「先生」でもなくて、「女」という呪縛からも解き放たれた「私」があるだけ。そうして、ようやく闇のその先に、不完全で美しく、歪で輝く、真実の光を見るの。それは常識という平坦で退屈な意見からこぼれ落ちてしまった真実で、呼吸をし、体温を持つ、生身の真実よ。叫ぶ事も囁く事も出来ないまま、粉々に引き裂かれてしまった真実よ。砂のように小さなそれらを丁寧に集めるの。何度も何度も身を沈めて集めるのよ。

と、集めた「砂」を両手に持っているかのような仕草を見せる。

その女  
私には書くべき事がある、と。伝えるべき事がある、と。知らされる。だから私は小説家でいられるの！

一瞬の静寂。

その女  
（落ち着いた声で）あなたにしか書けない物は一体何？全てを賭けて求める覚悟はもう出来て？私には手紙が、あなたにはこの話が……あとはあなた次第よ。

と、両手を差し出す。椅子の形に見える。

その女  
あら、どうしたの？ガチガチよ。楽にして。さ、私を越えて、深く広く、あなたの見た真実を伝えて頂戴。

と、幕全体が蠢く。

暗転。

音楽が止まると、再び、

○「その女」の書斎。

椅子に座った「その女」の姿が幕の向こう側にあり、形だけが浮き上がっている。

その女

そうね、タイトルは「小説家の椅子」でどうかしら？

暗転。

音楽（ベートーベン ピアノソナタ第23番第3楽章）

FIN

原作『人間椅子』江戸川乱歩（1925年）

転用・転載、再配布、上演禁止